

発表者 黒澤 俊二

テーマ 「一人ひとりのニーズに対応した多様な学び方について」

皆さん、おはようございます。まず、こういうよい機会をいただきありがとうございます。2つのテーマについて、それぞれどっちにするか迷ったのですけれども、両方とも大変意義のあるテーマで、私は「一人ひとりのニーズに対応した多様な学び」を選びました。時間が短くございますので、結論から申し上げたいと思うのですけれども、要するに、一人ひとりのニーズに対応した多様な学びを、特に学校教育で重点的に扱うとしましたら、結論的には、私の一番主張したい主題は、1つは、新しい教育の時代に向けて、先生方教員の研修・研究を充実させることが第一だと私は思っています。

それから2つ目に、そのためには環境整備が必要で、特に私が一番ここで主張したいのは、中野区独自で、今、35人学級でしょうか。それが、24人ぐらいにならないのかなと。私、全国幾つかの地域を回ってみますと、区市町村単位で、そういう学級定数の減といいますか、20人なり17人をしている区市町村もあるので、ぜひ、中野区でも。いろいろ予算的な面とか、大変なところでしょうけれども、何とかこれを求めたいと思います。

この2つのことを今日言いたくて参ったのですけれども、なぜこれがそう思ったのかということなのですから、まず私、このテーマについて、幾つか自分なりの解釈を試みました。まず最初に、一人ひとりのニーズに対応した多様な学びということなのですから、「ニーズって何なのだろう」と最初に思いました。英語の直訳としては、「要求」とか「求め」とかなのですけれども、教育の文脈では、一人ひとりの子どもの思いや願いだと私は捉えました。つまり、心の中にある、生まれたときから持っている要求というか、関心、意欲、態度とか、そういったものを総称してニーズというのだろうと。そうすると、そのニーズに基づいてこんなことがしたいという、いわゆる「ウォンツ」が生まれるという関係になると思います。

そうすると、学校教育ということで、多様性ということが出てくるわけですから、つまり一人ひとりのニーズが違いますから、それが多様性になるわけですから、じゃあ、多様性って何だろうと今度考えてみますと、特に教育においては、2つの多様性があると捉えました。

1つは、そもそも教育内容を多様化していく。これは、いわゆるオルタナティブな教育なんて言いますけれども、今の学校教育では、学習指導要領という公教育の目標がありますので、内容についての多様性というのは、区全体の教育としては考えなければいけないのでしょうか、学校教育のほうでは、むしろ目標はあらかじめ設定されていますから、その目標達成に向けて、いわゆる教育方法についての多様性というほうが問題になるのだろう

と捉えていました。

それから、私は、もう1つ、この「学び」という言葉が、最近、文科省をはじめとして、あちこちの教育委員会で使われるわけですが、この学びという意味はどういう意味が込められているのかと考えていました。すると、学びというのは、私の今までの体験によりますと、2つの意味があるのだらうと。1つはプロセス、いわゆる教育結果、もちろんできるようになったとか、結果としての成果があるわけですが、それよりもプロセスの経過の中にあるものを重要視するという意味が込められているのではないのでしょうか。

それから、もう1つは、これもよく言われることですが、子どもが学ぶということで、子どもの主体性ですね。というわけで、各地区の、例えば校内研究のテーマとか、そういう文言の中に「学び」と使われたときには、教育のプロセスにある、例えば思考力育成だとか、あるいは説明力だとか、そういった結果として何かを知識、もちろん、それも大事なわけですが、それよりもプロセスにあることに教育の目標が置かれているという意味が、学びの中に込められているのではないのでしょうか。

それから、これは当然のことなのですが、学ぶのは子どもでございますから、主体性。つまりプロセスということと、主体性という意味合いがこの学び、「学びング」と言えばいいのでしょうか。学びの中に込められていると思います。そういうことを踏まえて、今の、この与えられたテーマを私なりに解釈しますと、新しい学校のあり方が見えてきます。

というわけで、これからの小中学校は子どもたち一人ひとりのニーズに応じて、多様な教育方法が求められると。デジタル化とか、いろいろ新しい時代になりますけれども、そういうことにふさわしい授業改善が求められるのではないのでしょうか。

以上です。

区長      ありがとうございます。教員の研修に力を入れるべきだと、最初に結論でおっしゃいました。現状でいくと、研修というのは、どこら辺に必要なのですか。課題解決のためには、どこの課題を解決するために研修が必要だとお考えですか。

黒澤      まず、今の小中学校の現状を見ますと、やっぱり教えるということが、文科省の言葉ではありませんけれども、知識の伝達に凝ってしまっていると。そうではなくて、平成26年の中央教育審議会でも答申されていますけれども、子どもが主体的に学ぶとか、それから協働的に学ぶとか、それからもっと言うならば、社会と

のつながりを持って、協働的に、いわゆるコンピテンシー・ベースの学力なんて言いますが、そういうものを重視するという意識がいまだにとっても薄い。特に中学校さんは。ということで、そういうのを少しずつ、急には変わらないと思いますけれども、少しずつ研修を深めて、あるいは教職大学院とか、そういったものを。中野区には幾つか大学がありますので、そういったところに、協働的にやっていったらどうでしょうかという提案です。

区 長      あと、子どもの数、クラスの数、35人を二十何人にしたら。それは私もすごくいいなと思うのですが、今、教員採用自体がどんどん倍率が落ちていまして、教員の確保が難しいと思うのですが、そこについてはどうお考えですか。

黒 澤      私は、これについては、沖縄県とか、幾つかの区市町村で実践されていることを目の当たりにしたのですが、例えば、退職なさった先生方が大変多くなりますので、そういったものとか、あるいは大学の教育学部の学生を流用するとか、幾つか具体的な方策はあるかと思います。私は、それよりもお金の面が心配かなと思うのですが、中野さんの財政状況がどのくらいかわかりませんので、そこら辺がちょっと山ですが、少しずつそういうふうにして、教員の確保もしていかなければいけないかなと思っています。

区 長      あと最後に、ニーズから生まれるウォンツと書いてあるのですが、これはどのようにしてニーズをウォンツに高めるといって、その方法論としては何を考えているのですか。

黒 澤      ニーズというのは目に見えないし、子どもの生い立ちもありますので、それをどうウォンツにつなげるか。幾つか方策はあるかと思いますが、1つは教師の状況提示というのですかね。こういう場面があったときにあなたならどうするみたいな。具体的に言うならば授業の導入のあり方ですね。そういったことが僕は一番大きな要因になるかと思います。

区 長      そういう意味でも、やっぱり教師のスキルを上げる必要があるという。

黒 澤 そのとおりです。

区 長 分かりました。